15-16世紀イタリアにおける ウェスウィウス山噴火の記憶

――ジョルジョ・メルラと古代への関心――

福　山　佑　子

1．はじめに

早稲田大学図書館所蔵の1500年頃につくられた『ローマ皇帝群像』（F232-819）には、ハドリアヌスからヌメリアヌスまでのローマ皇帝の生涯を語った『ローマ皇帝群像』（4世紀末）のテクストに加え、「ローマ皇帝の生涯」と題された12葉が合本されている。ここには、カッシウス・ディオによってギリシア語で書かれた『ローマ史』（3世紀初め）より、ネルウァ、トラヤヌス、ハドリアヌスの生涯がラテン語に翻訳されている。この3人の皇帝の伝記に続いて、館蔵書には同じく『ローマ史』のティトゥス治世下で生じた79年のウェスウィウス山の噴火について述べた箇所も抜粋されている。これは、ポンペイやオプロンティスなどの周辺都市を壊滅させた噴火として広く知られる出来事だが、一緒に収録されているローマ皇帝の伝記とは時系列が異なり、内容としても特に繋がりがないものである。そもそも、ポンペイが再発見されたのは16世紀末のことであり、大規模な発掘により大きな注目を集めるようになったのは18世紀半ば以降であった。当時のポンペイが後世ほど注目を集める都市ではなかったにもかかわらず、なぜこの噴火についての記述が収録されているのだろうか。また、同時代のイタリアにおいて、ここで記されている79年のウェスウィウス山の噴火はどの程度認知されていたのだろうか。

本稿では、早稲田大学図書館所蔵『ローマ皇帝群像』に所収されている、ディオの『ローマ史』からの抜粋が翻訳された背景を探ることから、15-16世紀のイタリアにおける、人文主義者たちの79年のウェスウィウス山の噴火に対する関心を探ってみたい。

2．カッシウス・ディオのラテン語訳とその伝播

館蔵書の第１葉表には、「ローマ皇帝の生涯」との題の下に収録作品の一覧が記されている。まず、ディオの作品よりネルウァからハドリアヌスの伝記がジョルジョ・メルラによってギリシア語から翻訳されたと書かれ、続いて、スエトニウスの記述に代わるものとして、メルラが同じくディオの作品からウェスウィウス山の噴火について訳したとの一文がある。その次に、作者不詳の『ローマ皇帝群像』の皇帝名と作者とされる人物名が列挙されている。最下部には、ローマ皇帝の伝記のために用いた作者のリストがあり、ディオ、スエトニウス、『ローマ皇帝群像』の作者に加え、４世紀後半に『首都創建以来の歴史』を書いたエウトロピウスと、８世紀中頃に『ローマの歴史』を書いたパウルス・ディアコヌスの名前が挙げられている。

この館蔵書については、2016年に本紀要で資料紹介がされており、来歴について詳細を知ることができる。これによると、1490年にヨハネス・ルベウスによってヴェネツィアで印行されたものであり、彼は1489年と90年にスエトニウスの『ローマ皇帝伝』（２世紀初め）を第一部、『ローマ皇帝群像』を第二部としてローマ皇帝の伝記を刊行しているが、館蔵書はこの1490年の第二部のヴァリアントとされている。また、『ローマ皇帝群像』の前に挿入された12葉については1500年以降に追加されたものとされていたが、使われている木版イニシャル、活字の寸法、活字の使用法から、印刷業者のベルナルディーノ・ヴィタリが1503年頃に印刷したものであることが明らかにされている[(1)]。

すなわち、この書籍は1490年に印刷された『ローマ皇帝群像』と1503年頃に印刷された12葉が合本されたものだが、１冊にまとめられた時期は不明である。一方、館蔵本と同じ版は『ローマ皇帝の生涯』の名前でバイエルン州立図書館にも所蔵されており、ここでは1510年頃の制作と推測されている[(2)]。また、合本の時期についての言及はないものの、ヘンリー・ウォルターズ所蔵のインキュナブラリストにも同内容の冊子が確認できる[(3)]。年代は不明だが、おそらく1503年以降の早い時期に『ローマ皇帝群像』と12葉を合本した冊子が刊行され、流通したのだろう。

収録作品一覧で「スエトニウスに代えて」と書かれているように、ウェスウィウス山の噴火はスエトニウスの『ローマ皇帝伝』でも言及されているが、噴火が起こり、この災害で相続者なく死去した人物の財産は被災者の復興支援に宛てられるという、ティトゥスの政策が紹介される程度の情報しか書かれていない[(4)]。一方、ディオの作品ではより詳しい記述がなされている。以下、この12葉に書かれた内容を紹介しておきたい。

ディオはティトゥス治世下で起こったウェスウィウス山の噴火について『ローマ史』の66巻21–24節で語っており、まずこの山がナポリの近郊に位置することや、その植生と噴火活動の概要が紹介される。続いて、噴火の際の地震、噴石、降灰が説明され、人々が逃げ惑う様子も描かれる。更にヘルクラネウムとポンペイが噴火によって埋没したとの言及があり、ポンペイ

---

(1) 雪嶋宏一「新収資料『ローマ皇帝群像』（ヴェネツィア、1490年）について」『早稲田大学図書館紀要』第63号（2016）、71-87頁。

(2) BSB-ID 12476706. 館蔵書と同じく『ローマ皇帝群像』の装飾活字は欠落しているが、デジタル・コレクションを見る限り、館蔵書にある大量の巻末白紙はないように思われる。https://mdz-nbn-resolving.de/urn:nbn:de:bvb:12-bsb11048491-2（2022年９月21日閲覧）

(3) H. Walters, *Incunabula typographica: a descriptive catalogue of the books printed in the fifteenth century (1460-1500) in the library of Henry Walters*, Baltimore, 1906, 370-1.

(4) Suetonius, *Divus Titus*, 8.

では人々が劇場での公演を見ている際に噴火が起こったとも記される。最後に灰が数日間に渡って空を覆い、人々を慄かせたことが紹介されて、噴火の説明が終わる。メルラの翻訳はその先にも続いており、翌年にローマで大火事が起こり、ユピテル・カピトリヌス神殿、セラピス神殿、アグリッパの浴場などが焼失したことが紹介される。このとき、ティトゥスはウェスウィウス山の噴火の被害を受けたカンパニア地方にいたとされ、彼が行った復興事業についての記述がある。そして最後に語られるのは、現在はコロッセウムの名で知られるフラウィウス円形闘技場と隣接する浴場を、ティトゥスが建設したとの内容である。模擬海戦や剣闘士競技など、開催された見世物が詳しく紹介されるのに続き、彼が円形闘技場の上部から文字を刻んだ木製のボールをばら撒かせ、落ちてきたボールを受け取った者はそこに書かれた景品（食品、衣服、家畜、銀食器など）と引き換えることができたという、帝政期によく行われていたもののコロッセウムの落成式の出来事としては他の文献に登場しないエピソードが語られて、翻訳が締めくくられる[(5)]。

このメルラによる翻訳は『ローマ皇帝群像』のみならず様々な作品と合本されて他の印刷本にも収録されていた。まず12葉の印刷と同時期にあたる1503年頃に、古典作品をまとめた冊子の一部として、ミラノで印刷されている[(6)]。ここでも、12葉と同じネルウァからハドリアヌスまでの伝記と

---

(5) Dio, 66.21-4. Sparsionesについてはcf. Justinian, *Institutes*, 2.1.46; Suetonius, *Nero*, 11. ディオのウェスウィウス山噴火についてはC. Connors, 'In the Land of the Giants: Greek and Roman Discourses on Vesuvius and the Phlegraean Fields,' *Illinois Classical Studies* 40-1 (2015), 132-4が詳しい。

(6) *Index operum quæ in hoc uolumine continentur Censorini De die natali liber aureus, olim mutilatus, nunc adiectis quatuor integris capitibus, & innumeris pene clausulis antiquæ lectioni restitutus. Neruæ Traianique & Adriani Cæsaris uitæ ex Dione in Latinum uersæ a Georgio Merula. Item Vesæui montis conflagratio ex eodem Merula interpretæ. Cebetis Thebani tabula. Plutarchi libellus de differentia inter odium, & inuidiam. Basilii oratio de inuidia. Basilii epistola de uita solitaria*, Milano: Giovanni Giacomo da Legnano e fratelli, 1503. https://books.google.co.jp/books?id=PA8nolpmuPEC&hl（2022年10月28日閲覧）この本は1583年にパリで改訂版も印刷されている。Censorinus, *Censorini ad Q. Caerellium. De die natali noua editio*, Paris; Gilles Beys, 1583.

ウェスウィウス山の噴火の箇所のみが訳されており、判型が小さく１葉の文字数が少ないことから25葉を使って書かれているものの、訳文そのものは館蔵書と一致している。目次にはケンソリヌスの『誕生日について』に続き、ディオのネルウァからハドリアヌスまでの皇帝伝、同じくディオのウェスウィウス山の噴火が並んでいる。その後には、テーバイのケベス、プルタルコス、バシレイオスがナジアンゾスのグレゴリウスに宛てた手紙とあり、このミラノ版は特に相互の関係があるわけではない作品がまとめられた冊子であった。19世紀末に書かれたメルラの伝記には、ジョヴァン・バッティスタ・ピオがミラノに滞在していた時、晩年のメルラがディオの皇帝伝をラテン語に訳した記録があるとも書かれている[(7)]。とはいえ、ミラノ版とヴェネツィア版のいずれも、刊行されたのがメルラの死後であることから、どちらが先に作られたかは不明である。

メルラの翻訳は、1510年にヴェネツィアで印刷されたフラヴィオ・ビオンドの『ローマ再興』にも収録されている[(8)]。1446年に書かれたこの作品は、ローマの古代遺跡を詳細に解説したものであり、51点の写本が現存することからも作品の人気がうかがえる[(9)]。1481年以降には印刷本も刊行されるが、その１つが館蔵書の12葉を印刷したヴィタリの手によるものであり、ビオンドの作品がローマの遺跡を解説するものであることから、目次には明記しないかたちでコロッセウムの詳細が記されているメルラの翻訳を合本したのかもしれない[(10)]。このヴィタリによる『ローマ再興』の12葉は、

---

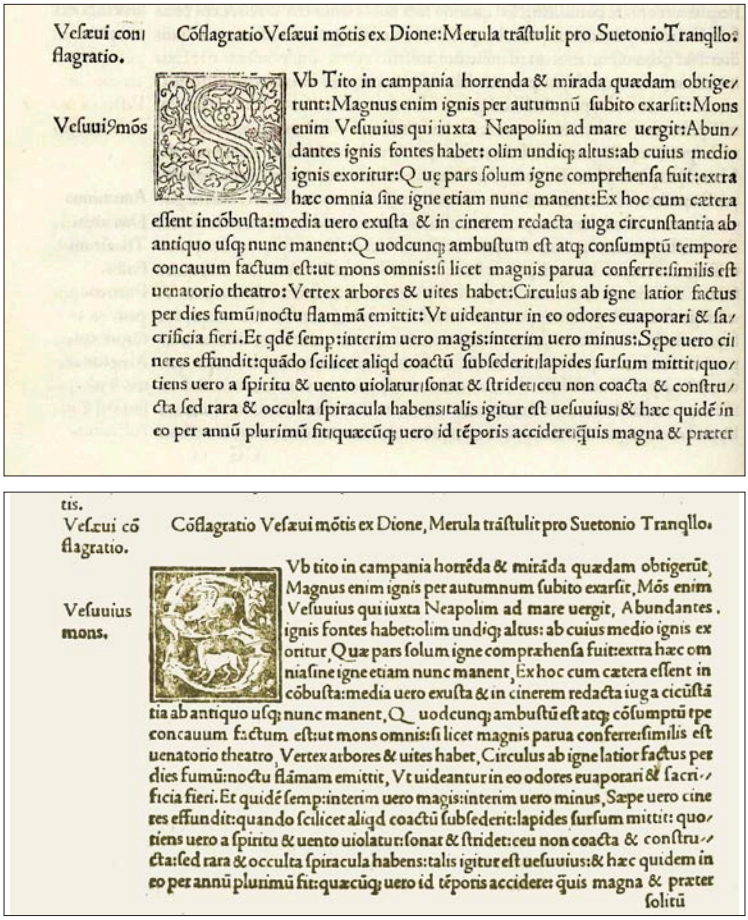
(7) F. Gabotto and A. Badini Confalonieri, *Vita di Giorgio Merula*, Alessandria: Jacquemod Giovanni, 1893, 54.

(8) F. Biondo, *De Roma instaurata*, Venezia: Gregorio de Gregori, 1510. https://books.google.it/books?id=cY6GyvwXUo8C（2022年10月28日閲覧）

(9) F. Della Schiava and M. Laureys, 'La *Roma Instaurata* di Biondo Flavio: Censimento dei manoscritti,' *Aevum* 87 (2013), 641.

(10) F. Muecke, 'The Epitome of Roman History in Biondo Flavio's Roma triumphans Book 7: Preliminary Explorations,' *Commentaria Classica* 8 (2021), 43-4.

頁ごとの文字の配置や書体が館蔵書と異なるほか、明らかに違う装飾活字が使われている（図１）。そのため、1503年頃の印刷の後、ヴィタリが新たに印刷しなおしたものが『ローマ再興』に再録されたと考えられる。



Vesæui con flagratio. Cõflagratio Vesæui mõtis ex Dione: Merula trãstulit pro Suetonio Tranqllo:

Vesuui mõs

Vb Tito in campania horrenda & mirada quædam obtigerunt: Magnus enim ignis per autumnũ subito exarsit: Mons enim Vesuuius qui iuxta Neapolim ad mare uergit: Abundantes ignis fontes habet: olim undiq; altus: ab cuius medio ignis exoritur: Q uę pars solum igne comprehensa fuit: extra hæc omnia sine igne etiam nunc manent: Ex hoc cum cætera essent incõbusta: media uero exusta & in cinerem redacta iuga circunstantia ab antiquo usq; nunc manent: Q uodcunq; ambustum est atq; consumptũ tempore concauum factum est: ut mons omnis: si licet magnis parua conferre: similis est uenatorio theatro: Vertex arbores & uites habet: Circulus ab igne latior factus per dies fumũ: noctu flammã emittit: Vt uideantur in eo odores euaporari & sacrificia fieri. Et qdẽ semp: interim uero magis: interim uero minus: Sæpe uero cineres effundit: quãdo scilicet aliqd coactũ subsederit: lapides sursum mittit: quotiens uero a spiritu & uento uiolatur: sonat & strideteeu non coacta & constructa sed rara & occulta spiracula habens: talis igitur est uesuuius: & hæc quidẽ in eo per annũ plurimũ fit: quæcũq; uero id tẽporis accidere: q̃uis magna & præter

tis.

Vesæui cõ flagratio. Cõflagratio Vesæui mõtis ex Dione, Merula trãstulit pro Suetonio Tranqllo.

Vesuuius mons.

Vb tito in campania horrẽda & mirãda quædam obtigerũt, Magnus enim ignis per autumnum subito exarsit, Mõs enim Vesuuius qui iuxta Neapolim ad mare uergit, Abundantes ignis fontes habet: olim undiq; altus: ab cuius medio ignis exoritur, Quæ pars solum igne comprehensa fuit: extra hæc omnia sine igne etiam nunc manent, Ex hoc cum cætera essent incõbusta: media uero exusta & in cinerem redacta iuga cicũstãtia ab antiquo usq; nunc manent, Q uodcunq; ambustũ est atq; cõsumptũ tpe concauum factum est: ut mons omnis: si licet magnis parua conferre: similis est uenatorio theatro, Vertex arbores & uites habet, Circulus ab igne latior factus per dies fumũ: noctu flãmam emittit, Vt uideantur in eo odores euaporari & sacrificia fieri. Et quidẽ semp: interim uero magis: interim uero minus, Sæpe uero cineres effundit: quando scilicet aliqd coactũ subsederit: lapides sursum mittit: quotiens uero a spiritu & uento uiolatur: sonat & strideteeu non coacta & constructa: sed rara & occulta spiracula habens: talis igitur est uesuuius: & hæc quidem in eo per annũ plurimũ fit: quæcũq; uero id tẽporis accidere: q̃uis magna & præter solitũ

図１　館蔵書（上）と『ローマ再興』（下）の「ウェスウィウス山の噴火」冒頭部[11]

(11)　画像出典https://archive.org/details/bub_gb_cY6GyvwXUo8C（2022年９月27日閲覧）をもとに筆者改変。

同じ1510年には、リヨンで印刷されたポンペイウス・トログスの歴史書などを含む本にも、３人の皇帝伝とウェスウィウス山の噴火が再録されている[12]。この本には1503年にミラノで刊行されたものとは異なる作品が収録されていることから、ディオの翻訳がなんらかの意図で新たに選ばれたものと考えられ、テクストが一定の評価を得て流布していたことがわかる。更に1516年と1519年には、アルド・マヌーツィオがヴェネツィアで館蔵書と同じ構成のローマ皇帝伝の冊子を印刷しており[13]、1527年にエラスムスが編纂した作品集にも12葉の内容が収録されている[14]。

---

(12) *Ivstini Historia Ex Trogo Pompeio quatuor [et] triginta epithomatis collecta. Lucij Flori Epithomata quatuor q[uam] cultissima in decem Titi Liuij decadas. Sexti Ruffi Consularis uiri ad Valentinianu[m] Augustum de Historia Romana opus dignissimum. Nerua cocceius ex dione Graeco per Georgium Merulam Alexandrinum. Traianus Nerua ex dione per eundem merulam. Adrianus ex dione graeco. Conflagratio Vesaeui montis ex dione per supradictum merulam. P. Victoris de regonibus Romae libellus unicus*, Lyons: Trot; Gabiano, 1510. https://books.google.co.jp/books?id=JDKMVFjWMrUC（2022年10月28日閲覧）

(13) G. B. Egnazio, *In hoc volumine haec continentur. Ioannis Baptistæ Egnatij Veneti de Cæsaribus libri 3 à dictatore Cæsare ad Constantinum Palæologum, hinc à Carolo Magno ad Maximilianum Cæsarem. Eiusdem in Spartiani, Lampridijque uitas, & reliquorum annotationes. Neruæ & Traiani atque Adriani principum uitæ ex Dione, Georgio Merula interprete. Aelius Spartianus Iulius Capitolinus, Lampridius, Flauius Vopiscus, Trebellius Pollio, Vulcatius Gallicanus ab eodem Egnatio castigati. Addita in calce Heliogabali principis ad meretrices elegantissima oratio non ante impressa*, Venezia: Aldus and Andr. Manutius, 1516. https://books.google.co.jp/books?id=3EZj7nFB6qoC（2022年10月28日閲覧）

(14) D. Erasmus (ed.), *Ex Recognitione Des. Erasmi Roterodami. C. Suetonius Tranquillus. Dion Cassius Nicaeus. Aelius Spartianus. Iulius Capitolinus. Aelius Lampridius. Vulcatius Gallicanus V. C. Trebellius Pollio. Flauius Vopiscus Syracusius: Qvibvs Adivncti Svnt. Sex. Aurelius Victor. Eutropius. Paulus Diaconus. Ammianus Marcellinus. Pomponius Laetus Ro. Io. Bap. Egnatius Venetus*. Köln: Hittorp, 1527. https://www.deutsche-digitale-bibliothek.de/item/243

このように、メルラの翻訳は複数の書籍に再録されているが、館蔵書はその最初期に印刷されたものであり、皇帝の伝記やコロッセウムへの関心など、多様な観点から再録の対象として択ばれていたことがわかる。しかし、そもそもなぜメルラは長大なディオの『ローマ史』からこれらの抜粋箇所を選んだのだろうか。

3．15-16世紀イタリアにおけるローマ皇帝伝の伝播とディオへの関心

メルラの12葉は『ローマ史』からネルウァ、トラヤヌス、ハドリアヌスの３皇帝の伝記とウェスウィウス山の噴火についての記述を抜粋しているが、これはスエトニウスの『ローマ皇帝伝』に書かれた最後の皇帝であるドミティアヌスと、『ローマ皇帝群像』に登場する最初の皇帝であるハドリアヌスの間の欠落を補うものとなっている。

カエサルからドミティアヌスまでを扱った『ローマ皇帝伝』は、９世紀初めの写本を最古のものとして200以上の写本が現存しており、印刷本も1470年にローマで印刷されて以降、15世紀のみで５つの版が制作されるなど、比較的広く認知された作品であった[15]。一方、ハドリアヌスからカリヌスとヌメリアヌスまでを扱う『ローマ皇帝群像』も、ペトラルカも所有していたとされる９世紀の写本のテクストを元に制作された19の写本が現存しており、印刷本も1475年にミラノで印刷されたものを最初の例として、1489年、90年、

TQJIAC5TOWUOZL5NQTB4ZWOPGGA5X（2022年10月28日閲覧）Mueckeは他にMilan 1508, Venice 1517, Florence 1519の印刷も確認できるとしている。Muecke, ‘The Epitome of Roman History in Biondo Flavio’s Roma triumphans Book 7,” 43.

⑮ 1470 Roma: I.A. Campanus, 1470 Roma: I. Andreas, 1471 Venezia: Anon., 1490 Venezia: B. de Tortis, 1493 Bonn: Ph. Beroaldus. M. Landfester and B. Egger (eds.), *Brill’s New Pauly Supplements 2: Dictionary of Greek and Latin Authors*, Leiden: Brill, 2009, 599-601.

1516年にヴェネツィアで印刷され、1518年にはバーゼルでもエラスムスが印刷本を刊行している。とはいえ、15世紀に印刷されたのは3版に留まり、その内容はそれほど広く知られているわけではなかった[16]。とはいえ、ローマ皇帝に関心を持つ人文主義者の間ではいずれも一定の認知を得ていたと言える。

その一方で、ギリシア語で書かれ文章も長大なディオの作品は、ルネサンス期にそれほど注目を集めていたわけではなく、出版や翻訳の機会は多くなかった。ヨーロッパ世界では失われていた彼の作品は、1408年にコンスタンティノープルでの留学から帰国したグアリーノ・ヴェロネーゼがディオの写本を持ち帰ったことにより知られるようになる[17]。彼のギリシア語写本は息子のバッティスタ・グアリーノに引き継がれるものの散逸してしまい、大きな影響を与えないままとなってしまったが、1413年にジョヴァンニ・アウリスパがコンスタンティノープルなど地中海東方地域で自ら集めた古典作品の写本をヴェネツィアへ持ち帰った中に含まれていたことで広く認知されるようになる[18]。彼の帰国後、早速ヴェネツィアの人文主義者フランチェスコ・バルベロがディオの写本の貸し出しを依頼した手紙が残されていることも、彼の作品に対する関心を示す証左である[19]。アウリスパは持ち帰ったギリシア語写本をラテン語に訳してもいるが、その

---

⑯ 写本Vaticanus Palatinus lat. 899. 印刷本 1475. Milano: Lavagnia, 1489 Venezia: Rizus, 1490 Venezia: Jo. Rubeus. 1516 Venezia: Aldus and Andr. Manutius, 1518 Basel: Erasmus of Rotterdam. *Brill's New Pauly Supplements 2*, 321-2. Incunabula Short Title Catalogue. https://data.cerl.org/istc/_search（2022年9月29日閲覧）

⑰ R. Sabbadini, *Le scoperte dei Codici Latini e Greci ne' secoli XIV e XV: Edizione anastatica con nuove aggiunte e correzioni dell'autore a cura di Eugenio Garin*, vol. 1, Firenze: Sansoni, 1967, 44-5.

⑱ Ch. L. Stinger, *Humanism and the Church Fathers: Ambrogio Traversari (1386-1439) and the Revival of Patristic Theology in the Early Italian Renaissance*, New York: State Univ. of New York Press, 1977, 36.

⑲ A. Franceschini, *Giovanni Aurispa e la sua biblioteca: notizie e documenti*, Padova: Antenore 1976, 38.

中にはディオの作品の部分訳も含まれており、これが中近世ヨーロッパにおけるディオ作品の最初の翻訳となった。彼が訳したのは「キケロに宛てたフィリスクスの慰め」(38巻18-29節)として知られる、流刑にされたキケロが哲学者フィリスクスと交わした対話についての文章である[20]。

15世紀にイタリアで知られていたディオの写本には、44-60巻が書き写されたヴェネツィアのマルチャーナ図書館所蔵の11世紀の写本と、36-54巻を記したフィレンツェのラウレンツィアーナ図書館所蔵の11世紀の写本の2点があるが、12葉で抜粋された箇所はこれらから訳出されたものではない[21]。ディオが書き記した80巻のうち、15世紀のイタリアに存在した彼自身のテクストは36-60巻のみであり、61巻から80巻はクシフィリヌスの要約しか残されていなかった。彼は1070年代にビザンツ皇帝ミカエル7世ドゥーカスの依頼で『ローマ史』の36-80巻の要約を作成した人物であり(既に失われていた70、71巻を除く)、12葉で翻訳された箇所が含まれる66巻はこの要約のみに存在する。

1438年のフェッラーラ・フィレンツェ公会議の際にコンスタンティノープルからイタリアを訪れ、そのままこの地に住むことになったベッサリオンは、1468年に所蔵写本のコレクションをヴェネツィアに寄贈しているが、彼の死後の1474年に作成された蔵書目録では36-68巻と44-59[60?]巻を収録した2点の写本が確認でき、この36-68巻のうち、61-68巻の部分はクシフィリヌスの要約と推測できる[22]。メルラは1475年頃に作成された『ローマ史』の36-80巻が記された写本を所蔵していたことが判明しているものの、その出どころは不明である。とはいえ、彼が活躍した時期のヴェネツィアには少なくともベッサリオン旧蔵の66巻を含む写本があり、メル

---

(20) R. Sabbadini, 'Briciole umanistiche: III Dione Cassio nel secolo XV,' *Studi Italiani di Filologia Classica* 6 (1898), 400.

(21) Sabbadini, 'Briciole umanistiche: III Dione Cassio nel secolo XV,' 398.

(22) L. Labowsky, *Bessarion's Library and the Biblioteca Marciana: Six Early Inventories*, Roma: Edizioni di storia e letterature, 1979, 195.

ラもテクストを入手できる状況にあった[23]。

1468年にベッサリオンが所蔵していた大量のギリシア語写本をヴェネツィアに寄贈していることからもわかるように、当時のヴェネツィアはヨーロッパ世界におけるギリシア語研究の中心地であった[24]。12葉でギリシア語からラテン語への翻訳を行ったメルラもこのヴェネツィアを中心に活躍した人文主義者であり、1431年に北イタリアのアレッサンドリアで生まれ、他都市で教育に携わった後、1464-5年からヴェネツィアに居住した。1468-84年にはサン・マルコ同信会の修辞学教師に任命されて教育活動に携わったほか、マルティアリス、キケロ、プラウトゥス、オウィディウス、ウェルギリウス、大プリニウスなどのテクスト校訂や注釈書を刊行している。特に1475年から82年にかけては大プリニウスのテクスト解釈を巡る論争がヴェネツィアの人文主義者の間で起こり、メルラと彼を批判する者たちは互いを論駁する本を繰り返し出版して激しい議論を交わしてもいた[25]。

---

(23) この写本は1487年にイニーゴ・ロペス・デ・メンドーサによって買い取られ、現在はスペイン国立図書館に所蔵されている。BNE MSS/4714. G. de Andrés, *Catálogo de los códices griegos de la Biblioteca Nacional*, Madrid: Ministerio de Cultura, Dirección General del Libro y Bibliotecas, 1986, 280-1. ボワスヴァンはこのマドリードの写本は、15世紀にパリのサン・ジェルマン・デ・プレ修道院で作成されたフランス国立図書館の写本（Coislinianus 320）の系統としている。彼はクシフィリヌスの作品について、15世紀の写本２点を元に14の写本が現存し、15世紀のもう１点はブロワ城の図書室にフランソワ１世の蔵書として所蔵されていたものをフルヴィオ・オルシーニが入手し、1600年頃にヴァチカン図書館へ移された写本（Vat.gr.145）としている。ボワスヴァンはベッサリオンの写本について言及していないが、ベッサリオンの蔵書目録にディオの作品が68巻まであるとされていることから、15世紀のヴェネツィアにもクシフィリヌスのテクストがあったと推測できる。U. Ph. Boissevain, *Cassii Dionis Cocceiani historiarum romanarum quae supersunt II*, Berlin: Weidmann, 1901, I-VIII. マドリードのメルラ旧蔵写本についてはT. Martínez Manzano, 'Entre Italia y España: el Dión Casio de Giorgio Merula,' *Νέα Ῥώμη. Rivista di Studi Bizantinistici* 13 (2016), 363-81 が詳しい。

(24) N. G. Wilson, *From Byzantinium to Italy: Greek studies in the Italian Renaissance*, Baltimore: Johns Hopkins University Press, 1992, 62; 124-44.

(25) Ch. G. Nauert, Jr., 'C. Plinius Secundus (Naturalis Historia),' *Catalogus Translationum et Commentariorum* 4 (1980), 308.

その後、1484年からはルドヴィーコ・イル・モーロに誘われてパヴィア大学で教鞭をとり、1494年に没するまでミラノで晩年を過ごしている[26]。

生涯で数多くの古典作品の刊行に携わったメルラだが、彼は12葉の内容を最初に刊行した人物というわけではない。ネルウァとトラヤヌスの生涯は、1493年にボニファーチョ・ベンボによってラテン語に翻訳されたものがローマで印刷されている[27]。彼は1490年頃にパヴィア大学で教えていた時期があり、これはメルラが仲介したものであった[28]。しかし、インノケンティウス８世の招聘により彼は僅か２－３年でパヴィアを去り、ローマで修辞学を教えることになる。このローマで出版されたディオの翻訳では『ローマ皇帝伝』と『ローマ皇帝群像』で欠けているネルウァとトラヤヌスの伝記のみが訳出されており、ハドリアヌスも含むメルラ版とは内容が異なっている。このベンボの翻訳は２つの皇帝伝をつなぐことのみを意図していたのだろう。

次いで、1503年にメルラによるディオの翻訳がミラノとヴェネツィアで印刷される[29]。これはベンボに含まれないハドリアヌスの伝記とウェスウィウス山の噴火を含むものであり、彼は皇帝伝のみならず他の要素への

---

(26) V. Branca, 'L'Umanesimo Veneziano alla fine del Quattrocento. Ermolao Barbaro e il suo circolo,' in G. Arnaldi and M. Pastore Stocchi (eds.), *Storia della cultura veneta. Dal primo Quattrocento al Concilio di Trento*, vol. 3. 1, Vicenza: N. Pozza, 1980, 157-9; M. L. King, *Venetian Humanism in an Age of Patrician Dominance*, Princeton: Princeton University Press, 1986, 400-401.

(27) ボニファーチョ・ベンボによるディオの翻訳は、Incunabula Short Title Catalogue によると現在も41部現存している。https://data.cerl.org/istc/ic00243000（2022年10月28日閲覧）バイエルン州立図書館所蔵書https://mdz-nbn-resolving.de/bsb00064416（2022年10月28日閲覧）

(28) Bonifacio Bembo, *Bonifacii Bembi in sapientissimi principis Ludovici laudes oratio in scholis papiensibus habita*, Milano: Leonhard Pachel, 1490, 3. https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/bpt6k60176q（2022年10月28日閲覧）

(29) 註６参照。

関心からも訳出作品を選んだのだろう。このメルラによる翻訳は、ベンボのものとは言葉選びも文の解釈も全く異なるものであり、彼が独自にギリシア語から翻訳したと考えられる。

皇帝伝については他書との関連から翻訳の理由をある程度推測できるものの、冒頭でも述べたように15世紀のイタリアではポンペイに対する関心は低いものであり、メルラがウェスウィウス山の噴火の箇所を訳出した理由は定かでない。そこで次節では、15-16世紀のイタリアにおける、79年の噴火とこれを経験した２人のプリニウスに対する関心を確認してみたい。

４．「ウェスウィウス山の噴火」と79年の噴火への関心

ティトゥス治世下のウェスウィウス山噴火は、ポンペイなどの諸都市を埋没させたことに加え、大プリニウスの死因になったことでも知られている。彼は『博物誌』の作者として古代から連綿と名を知られており、中世にはその作品が主に自然科学の情報源として数多く引用され、俗語に翻訳されたり、大学で教科書として使われるなどしていた。14世紀からはペトラルカなどによるテクスト研究が始められ、ボッカッチョの引用などを通じて科学的観点以外からも注目を集めるようになる。15世紀以降も彼の作品は広く読まれており、印刷本も1469年にヴェネツィアで刊行されたのを皮切りに1500年までの間に少なくとも14版が刊行されている[30]。1469年はジョ

---

(30) 1469 Venezia: Giovanni da Spira, 1470 Roma: Sweynheym/Pannarz, 1472 Venezia: Jenson, 1473 Roma: Sweynheym/Pannarz, 1476 Parma: Corallus, 1476 Treviso: Manzolus, 1480 Parma: Portilia, 1481 Parma: Portilia, 1483 Venezia: Novimagio, 1487 Venezia: Saracenus, 1491 Venezia: Blavis, 1496 Brescia: J. & A. Britannicus, 1496 Venezia: Zanis, 1498 Venezia: Benalius, 1499 Venezia: Alvisius. H. Jones, *Printing the classical text*, Utrecht: Hes & de Graaf, 2004, 26; 30-36; 42-47; 56-61; 67-71; 77-84; 89-99. 印刷本は1599年までに50以上の版が確認されており人気を集めていたことがわかる。Ch. Walde et al, (eds.), *Brill's New Pauly Supplements 5. The reception of classical literature*, Leiden: Brill, 2012, 327-36.

ヴァンニ・ダ・スピーラがヴェネツィアに活版印刷術をもたらした年であり、同年に刊行された『博物誌』は彼が早々に着手した印刷物の１つであったことも作品が重要視されていたことを示している[31]。先述の1475年から82年にメルラと人文主義者の間で生じた大プリニウスのテクスト解釈を巡る論争も、『博物誌』に対するこのような関心の流れの中にあるものであった。

このように中世以降も人気を集めた大プリニウスがウェスウィウス山の噴火で死去した詳細を伝えるのが、彼の甥にあたる小プリニウスの『書簡集』に収録されたタキトゥス宛ての手紙である[32]。この作品は14世紀前半からヴェローナのカピトラーレ図書館に所蔵されている写本を通じて知られており、15世紀前半には手紙を書く際の手本として北イタリアを中心に広く参照されていた[33]。更に1471年から印刷版が刊行され始め、1500年までの間に11版が確認されている[34]。

『博物誌』と『書簡集』が広く読まれたこともあり、この著名な博物学者の死は、特に16世紀のヨーロッパで関心を集めていた。1509年に刊行されて版を重ねた、バッティスタ・フレゴーゾによる伝記集でも、大プリニウスがウェスウィウス山の噴火の際に亡くなった著名な学者であることが述べられている[35]。以降も様々な伝記集に彼の生涯が紹介され続けており、

---

(31) H. Jones, *Printing the Classical Text*, Leiden: Brill, 2021, 28.

(32) Pliny the Younger, *Epistulae* 6. 16.

(33) Walde et al., *Brill's New Pauly Supplements 5*, 344.

(34) 1471 Venezia: Valdarfer, 1471 Roma: Shurener, 1476 Napoli: Moravus, 1478 Milano: Lavagnia, 1483 Treviso: Jo. Rubeus, 1490 Roma: Silber, 1490 Venezia: Jo. Rubeus, 1498 Bologna: Faielli, 1500 Venezia: Roscius, 1500 Venezia: A. Rubeus, 1500 Venezia: Jo. Rubeus. Jones, *Printing the classical text*, 26; 30-36; 42-47; 56-61; 67-71; 77-84; 89-99.

(35) B. Fregoso, *Factorum, dictorumque memorabilium libri IX*, Paris: apud Petrum Cavellat, 1578, 280-1. https://books.google.co.jp/books?id=D9soBdpOpp8C&hl（2022年10月28日閲覧）フレゴーゾは1478-83年にジェノヴァでドージェを務めた人物で、この作品は1509年の初版以降、16世紀後半に幾度も再版されている。

時にはエトナ山に身を投げたエンペドクレスと対比されるなど、その死に関心が向けられていた。その際に主な情報源となったのは小プリニウスの『書簡集』だが、スエトニウスの『文法家・修辞家列伝』に似た文体で書かれた作者不詳の「プリニウス伝」のテクストも、9世紀の写本を現存する最古のものとして15世紀まで度々書き継がれていた[36]。『博物誌』と同じ書籍に度々収録されており、スエトニウスの作品とされることもあったこの伝記は、プリニウスの死の経緯が内容の半分程を占めており、彼の生涯の中でも特にその死に大いなる関心が寄せられていたことがわかる[37]。

古代の幅広い知見を伝える『博物誌』は中世以降のヨーロッパで人気を集めた作品であり、執筆者である大プリニウスも人々の興味をそそる存在であった。そのため、15世紀の人文主義者たちは彼の死の契機となった79年のウェスウィウス山の噴火にも関心を持ったのだろう。とはいえ、メルラが翻訳したディオによる噴火の記述がプリニウスの作品に併録されてはおらず、様々な古代の作品と一緒に収録されていることからは、『博物誌』以外の観点からもウェスウィウス山に関心が寄せられていた可能性も考えられる。

そもそもウェスウィウス山の噴火活動は1139年から小康状態が続いており、ようやく小規模な噴火が生じたのはメルラの翻訳が世にでる3年程前の1500年であった[38]。また、同時期の1504年にはヤーコポ・サンナザーロが

---

(36) R. Tomlinson, “Anecdote, Example, Method: Renaissance Accounts of the Death of Pliny the Elder,” in E. Gilby and P. White (eds.), *Method and Variation: Narrative in Early Modern French Thought*, Oxford: Legenda, 2013, 23-4. C. Plinii Secundi, *Veronensis, historiae naturalis libri triginta duo: trigesimi secundi finis et alii quinque integri desiderantur*. Paris B.N. Lat. 6795, fol. 1v. https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/btv1b90769859（2022年10月28日閲覧）

(37) M. Reeve, “The *Vita Plinii*,” in R. Gibson and R. Morello (eds.), *Pliny the Elder: Themes and Contexts*, Leiden: Brill, 2011, 210-20.

(38) I. D. Rowland, *From Pompeii: The Afterlife of a Roman Town*, Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 2015, 21.

散文による叙述と韻文による牧歌から構成された作品『アルカディア』を発表して一世を風靡している[39]。作品はギリシアを訪れた主人公が牧人たちの様子を語った後、故郷のナポリへ戻るという構成になっており、その際にウェスウィウス山の噴火によりポンペイが廃墟と死に覆われる都市となってしまったことが述べられている[40]。数年前の小規模な噴火が呼び水になったかどうかは不明だが、ナポリ周辺の人々にとって噴火が再び身近なものとなり、失われた古代都市への関心も喚起されたのかもしれない。この作品は1502年にヴェネツィアで海賊版が出版された後、1504年にナポリで公式に出版されていることから、北イタリアでは1503年の時点で手にすることができる作品であった。『アルカディア』は1514年にはヴェネツィアのアルド・マヌーツィオからも出版され、その後も度々再版されている[41]。

また、1514年に印刷されたアンブロージョ・レオーネの『ノラについて』においてもウェスウィウス山の噴火は言及されている。この本は古代から同時代までの都市の連続性を、歴史・地理・風俗的な観点から記した作品であり、ウェスウィウス山近郊に位置するノラの街を語るにあたって、レオーネはビオンドの作品に付された1510年版収録のメルラの翻訳を参照して、79年のウェスウィウス山の噴火について記述したとされている[42]。1548年には同じくビオンドの『ローマ再興』をモデルとしてナポリ周辺の

---

(39) 村瀬有司「アルカディア（抄）解題」池上俊一（監）『原典イタリア・ルネサンス人文主義』名古屋大学出版会、2010年、760-1頁; Rowland, *From Pompeii*, 31.

(40) J. Sannazaro, *Arcadia*, Milano: Società Tipografica de' Classici Italiani, 1806, 189-90.

(41) N. Smith, 'The Genre and Critical Reception of Jacopo Sannazaro's "Eclogae Piscatoriae" (Naples, 1526),' *Humanistica Lovaniensia* 50 (2001), 205; 板垣ゆき「ルーヴル美術館所蔵《田園の合奏》に関する考察」『WASEDA RILAS JOURNAL』7（2019）、21頁。

(42) L. Miletti, *Ambrogio Leone's de Nola, Venice 1514: Humanism and Antiquarian Culture in Renaissance Southern Italy*, Leiden: Brill, 2018, 38. この本は1500年に初版が印刷されている。

古代遺跡について紹介する本も、ベネデット・ディ・ファルコによって刊行されている[43]。このように、16世紀初頭のナポリの人文主義者たちは、古代への憧憬の一環としてウェスウィウス山の噴火を捉えるようになっており、その影響の一部はヴェネツィアにも及んでいた。

また、ウェスウィウス山の火山活動再開も引き金になったのか、16世紀には火山に対する科学的な関心も高まっており、1538年にはナポリの人文主義者シモーネ・ポルツィオが、当時はウェスウィウス山よりも火山活動が活発であったポッツォーリの噴火活動について記した本を刊行している。

もっとも、ポンペイへの関心は依然として限られた範囲のものでしかなかった。例えば1592年からナポリ王家の依頼で建築事業にかかわっていたドメニコ・フォンターナが、ポンペイ近郊での水路建設工事の最中に地下に埋もれた建築物やDECURIO POMPEIと刻まれた碑文を発見した際、おそらく彼のローマでの経験から発見物が古代ローマの遺跡に関連するものと判断できたと推測されているにもかかわらず、雇い主もフォンターナも発掘を行おうとはしなかった[44]。すなわち、ポンペイや埋没した古代都市への関心は、あくまで一部の人文主義者のみで共有されていたものであり、1748年にスタビアの発掘が始められ、エルコラーノ、ポンペイと対象が広がり、数多くの遺物が発見されるようになってようやく、この地域の古代遺跡に対する関心は急速に高まっていくことになる[45]。

また、メルラによる翻訳の最後に記されたコロッセウムに対する関心も15世紀に高まっていたものである。古代にはフラウィウス円形闘技場と呼ば

---

(43) B. Di Falco, *Descrittione dei luoghi antiqui di Napoli, e del suo amenissimo distretto*, Napoli: Gio. Francesco Sugganappo, 1549. https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/bpt6k58332c (2022年10月28日閲覧) H. Hendrix, 'City Branding and the Antique: Naples in Early Modern City Guides,' in J. Hughes and C. Buongiovanni (eds.), *Remembering Parthenope: The Reception of Classical Naples from Antiquity to the Present*, Oxford: Oxford University Press, 2015, 229-32,

(44) Rowland, *From Pompeii*, 31-2.

(45) Rowland, *From Pompeii*, 86.

れたこの建築物は、12世紀からヨーロッパ各地で人気を博した『ローマ驚異の書』などのローマ案内書の中で、「ウェスパシアヌスとティトゥスの宮殿」や「神殿」と説明されるなど、かつての見世物の場所としての記憶は薄れていた[46]。スエトニウスなどのテクストを元に、1448年にポッジョ・ブラッチョリーニがウェスパシアヌスによって建設された円形闘技場だと明示し、1484年頃にポンポニオ・レートがより詳細な古代での使われ方の説明をするまでは、案内書の耳目を惹く説明の方が広く知られており、この状況に変化が生じたのが、メルラも活躍した15世紀後半であったのである[47]。

このように、メルラは自身や同時代の大プリニウスや古代に対する関心に合致する箇所をディオの『ローマ史』から選び、15世紀末に翻訳をおこなった。その後、大プリニウスに対する継続的な関心だけでなく、ウェスウィウス山の噴火活動の再開や『アルカディア』を通じた周辺地域に対する牧歌的な理想郷としてのイメージの流布、ビオンドの『ローマ再興』に端を発する古代遺跡全般に対する関心の高まりに繋がるかたちで、彼の翻訳は様々な印刷本に再録されることになったのだろう。

5. おわりに

本稿でとりあげたメルラによるウェスウィウス山噴火についての翻訳は、テクストの再録だけでなく、内容が他の作品で引用されることによって、長期的な影響を与えることになった。1634年に刊行されたジュリオ・チェーザレ・カパッチョの『イル・フォラスティエロ』には、登場人物がディオの作品にはウェスウィウス山の噴火がこのように記されていたと説

(46) F. M. Nichols, *The Marvels of Rome*, New York: Italica Press, 1986, 62-4; J. Osborne, *Master Gregorius: The Marvels of Rome*, Toronto: Pontifical Institute of Medieval Studies, 1987, 35-6.

(47) D. Palombi, 'Storie di una Identità Contesa: il Colosseo, da Tertulliano a Mussolini,' in R. Rea et al. (eds.), *Colosseo*, Roma: Electa, 2017, 48.

明する場面があり、ポンペイとヘルクラネウムが埋没したとも書かれている[48]。この作品はナポリ観光のためのガイドブックとして17世紀に最も人気を集めた作品であり、メルラによるディオの翻訳の内容は多くの人の目に触れることになった[49]。また、1631年にウェスウィウス山が大規模な噴火活動をおこなったことに影響されたのか、巻末には86頁に渡る長文でウェスウィウス山の噴火について記されてもいる[50]。さらに、1748年にイタリア人考古学者のマルチェッロ・ヴェヌーティが刊行し、1750年には英語にも翻訳されたヘルクラネウムの発掘について記した書籍でも、メルラが翻訳したディオによる噴火の記述をラテン語のまま引用しながら79年の噴火の惨状が説明されており、作品の長期的な影響が確認できる[51]。

このように、18世紀にポンペイなどの遺跡が注目を集めるようになっても、メルラが15世紀末に翻訳したディオの『ローマ史』からの抜粋は参照されていた。彼の先駆的な視点により択ばれたウェスウィウス山の噴火は、館蔵書が印刷された1503年頃から200年以上に渡って読みつがれ、後のグランドツアーの時代においても繰り返し参照されることになる。館蔵書ではローマ皇帝の伝記に紛れ込んだかのようにも見えるメルラの翻訳だが、

---

(48) Giulio Cesare Capaccio, *Il Forastiero*, Napoli: Gio. Domenico Roncagliolo, 1634, 1008. https://books.google.it/books?id=kgNAAAAAcAAJ&hl (2022年10月28日閲覧)

(49) G. Sodano, "Governing the city," in T. Astarita (ed.), *A Companion to Early Modern Naples*, Leiden: Brill, 2013, 109; Rowland, *From Pompei*, 32-4.

(50) Capaccio, *Il Forastiero*, 1634, 1025-110.

(51) Niccolò Marcello Venuti, *Descrizione delle prime scoperte dell'antica città d'Ercolano: ritrovata vicino a Portici, villa della maestà del re delle Due Sicilie*, Roma: Bernabò e Lazzarin, 1748, 44-46; Idem, *Descrizione delle prime scoperte dell'antica città d'Ercolano: ritrovata vicino a Portici, villa della maestà del re delle Due Sicilie*, Venezia: Baseggio, 1749, 42-44; Idem, *A description of the first discoveries of the antient city of Herculaneum, found near Portici, a country palace belonging to the king of the Two Sicilies*, London: George Woodfall, 1750, 43-4. この引用はポンペイとヘルクラネウムの埋没までであり、ローマの大火やコロッセウムについての箇所は引用されていない。

これは15世紀末から16世紀初頭の北イタリアを中心とする人文主義者たちの関心を投影した作品であり、ナポリの人文主義者たちとも繋がりながら長く影響を与え、後の古代遺跡ブームに繋がる水脈の１つになった作品と言えるだろう。

（ふくやま　ゆうこ　国際学術院准教授）